

シラチャ校だより

泰日協会学校
シラチャ校
12, 1, 09

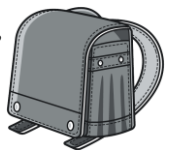


「一人一人を大切にせる教育」のために

ストレス社会の中で大人がふっと気を休める時間や空間が欲しいように、学校という社会の中で生きる子どもたち一人一人にとって保健室が「なんとなく落ち着く居心地のいい場所」になれば、という思いがあります。

子どもたちのうまく言葉にできない気持ちは体の不調や痛みとなって表れることがあります。子どもは一人一人育った環境や背景は違いますが、成長過程において様々な形で「自分は何のために生まれてきたのだろう」と「今ここに生きていることの意味や自分の価値」を探します。「テストの点数が悪かった」「友達から仲間外れにされているような気がする」「先生に叱られた」など大人から見れば大したことのないように思える問題でも、子どもにとっては自分の存在価値への問いにつながる重大な問題で、そういった思いを大人に話すということは大変勇気のいることです。そのため、子どもたちは大人の動きをよく見ています。今までも私が忙しそうにしていると何か話したそうな子どもも遠慮して、結局話を聴くタイミングを逃してしまうことがありました。

人は自分の感情、特に怒りや悲しみ、憎しみなどネガティブな感情を受け止めてもらうという経験を通して初めて自分の感情を意識し、表現する安心感がもてると言われています。もし子どもがネガティブにとられがちな感情を表出したときはチャンス！人や自分を傷つける言葉や溢れる涙の裏には、子どもの「こうありたい」という思いや願いが含まれていることがあるからです。様々な経験を通して生きる意味や自分の価値を見つけながら人として成長していくために、攻撃的・否定的であるときこそ、子どもの思いや願いを聴き、そうしてもなお大人や社会は自分を認めてくれるのだという安心感が子どもには必要なのではないのでしょうか。それが保証される環境がいわばその子どもたちにとって「なんとなく落ち着く居心地のいい場所」になれるのかな、と思っています。保健室に限らず、家庭や学級でも同じことが言えるのかもかもしれませんが・・・



そう思っはいても私たち大人は、ある時は自分の弱さから、ある時は自分を守るために知らず知らずのうちに子どもを追い詰めていることがあるかもしれません。「そんなことで泣いているの？」「テストの点がよかったらゲームを買ってあげるから。」子どものためを思っ言っしているつもりでも結局は大人の都合で動いていることがありませんか？アメリカの精神科医ウィリアム・グラッサー博士の「選択理論」によると、ほとんどの親や教師が子どもを心から愛し認めているのに、それが伝わっていない場合が多いのは「人間関係を壊す7つの習慣」＝「批判する・責める・文句を言う・がみがみ言う・脅す・罰する・自分の思い通りにしようとして褒美でつる」を使っているからだと言っしています。逆に人間関係を築く7つの習慣は「傾聴する・支援する・励ます・尊敬する・信頼する・受容する・意見の違いは交渉する」。私自身、自分の行動を振り返り反省する毎日です。

10月にはQUテストを実施し、それをもとに11月19～27日には第2回教育相談週間を設けました。私たちは日頃からそれぞれの立場で子どもたちと向き合っっていますが、改めて話を聴くための資料や話し合うよい機会となりました。これからも「一人一人を大切にせる教育」を実践していきたくっと思います。

担当 養護教諭 鈴木 瞳